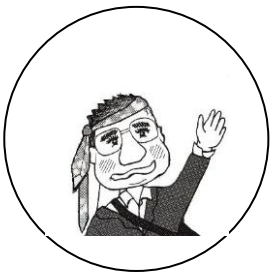
大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（14）

いよいよ最後の目的に向かって出発である。ガントクからバグドグラ空港まで約 124 キロ、山道なので約４時間である。国内便バグドグラ発は 14 時 40 分なので、逆算すると正午までに到着すればよい。従って、８時に出発すれば十分である。しかしヒマラヤ山中なので山崩れによる渋滞があるかもしれない。それで余裕をみて６時 30 分に出発することにした。州境についたのは８時であった。手続きは簡単で入境許可書を見せればよかった。バグドグラ空港からダージリンに向かう山道よりは、はるかによかった。印中国境紛争のための軍需道路であろう。

1959 年チベット動乱、ダライ・ラマがインドに亡命した。印中関係が悪化した。1962 年（昭和 37 年 10 月）中国人民解放軍が国境で大規模攻撃を行い、インド軍は敗走した。これはインドの「トラウマ」になった。

去る（2025）９月３日、首都・北京で「抗日戦争勝利 80 年」式典があり、悪の枢軸三人組と言われる習近平国家主席、ロシアのプーチン大統領、北朝鮮の金正恩総書記が顔をそろえた。

その２日前に、政治・経済・国際安全保障を目的とする「上海協力機構」があり、加盟国の首脳としてモディ首相も参加した。この時の政治漫画が面白い。習近平主席とモディ首相が仲良く右手で握手しているが、腰のうしろに隠した左手はお互い拳骨をつくっているというマンガである。1962 年のトラウマはまだ続いているし、まだ続く。

たとえば、習主席がニコニコしながら左手で拳骨、右手で握手を求めてきたら、モディ首相が（内なる仏さまに）合掌して応じるマンガならもっと面白かった。神・仏のない習主席とアートマン（神我）を奉じるモディ首相とは、同じ政治家ながら対照的、水と油である。

印中国境紛争のとき、中国で反戦平和活動があったか知らないが、インドではあった。しかも、日本人僧たちであった。そのグループは、アルナーチャル・プラデーシュ洲（ブータンの東）の最激戦地ボームディラー（Bomdila）周辺に二週間滞在した。

「途中には戦車の残骸が散見され、行き交う軍事車輛は、皆日本製だった。道端の草花が、鮮血の如き色であったのが妙であった」（『ひとすじの道』酒迎天信）

その流れは「デリー・北京友愛行進」につながっていった。この行進団は、英国のマイケル・スコット牧師、ガンディー主義者のＪ・Ｐ・ナーラーヤンが発起したものであった。米国・英国・オーストラリア・日本・インドで約三十名が行進した。その中に長野県出身の青年が加わっていた。その人こそ、わが輩の初渡印のとき七通の紹介状を書いてくれた恩人で

あった。

ヒマラヤ山系からの下りということもあるが、バグドグラに９時45分に着いてしまった。早目の昼食後空港に着いたのは11時50分であった。ところで、われ等はどこに行こうとしているのか。デリーである。少女の、いや元少女の最大の願いは、もう一度デリーで尼僧さまに会うことであった。「今生でお会いできるのは最後かもしれない」と元少女は言った。

この尼僧さまは何処におわすのか。デリーにはいくつか世界遺産があるが、フマユーン廟もその一つである。その近くに白亜の仏舎利塔（2007年建立）がある。尼僧さまが建立されたものである。わが輩は「奇跡の塔」という。

空中から指輪や聖灰をだしたりすることを、わが輩は奇跡とはいわない。水の上を歩くことができる。水中にながく留まることができる。密封された土中で三日ほど過ごすことができる、などなどを奇跡とはいわない。わが輩が「奇跡」とするのは、そのような物質的なものではなく、人と人の絡み合いで、思いもよらないことが事象として顕現することを言う。

たとえば、一人の外国人が日比谷公園（東京都所管）に仏塔を建てることができるだろうか。「No！」である。しかも（失礼ながら）地位も名誉も資金もない一外国人に、そもそも東京都の許可がおりるはずがない。

それなら、なぜ建立できたのか。不思議なご縁、人と人との絡み合いによる。尼僧さまはただひたすら、ゆるやかな「魂をゆさぶる」マントラを唱えて街中を歩いていただけである。

詳しくは、わが輩のレポート「日本人尼僧が建てたデリー大塔」(『大法輪』2002年2月号)を図書館で借りて読んでいただきたい。この「魂」については、別エッセイで語ってみたい。

尼僧さまから、ある依頼がわが輩に舞い込んだ。蔭になり日向になり尼僧さまを支えていたデリー州高官（オリッサ出身）からの依頼である。

「ハワイ大学の同窓生を探してほしい」

日本の大学で教鞭をとっているということだが、どの大学だか分からなかった。あの頃はインターネットが普及していなくて調べようがなかった。(さて困った・・・)のちほど名前を聞いて、すぐに分った。「死の瞬間」をテーマとするカール・ベッカー京大教授であった。川崎信定『死者の書』にも名前が載っている。決して帰国しない尼僧さまが一度だけ帰国されたとき、二人で研究室を訪問した。(1992年6月25日）そのとき『日印文化交流の発信』（インド文化センター刊）をお渡しした。ついでながら、厚顔無恥にもわが輩の小論文、いや雑文「日本ヨーガ普及小史」を（無理やり）おいて帰った。後日ご丁寧な礼状を頂いた。「医療倫理やターミナルケアと日本人の伝統的死生観の研究に励んでおります」署名は、別華・薫　拝とあった。

輪廻転生があるのか、わが輩には分からない。知覚が止まればすべてが消えてしまう、とある哲学者は言う。しかし、生きている限りは最期の「死の瞬間」はある。そのときに「私とは誰か？」と問うことができれば、まちがいなく「お浄土」に逝けるだろう。

元少女は人生最後の目的をはたした。シッキム王国の旅は終わった。

「大魔王よ。またインドへ行けたら行きたい！」

さきほどインドから帰ったばかりの元少女が叫んだ。

再びインド輪廻世界を「徘徊」するかもという予感がわれらに湧き上がってきた。

インドよ。来年もよろしく。